



# JSPS London

## NEWSLETTER

No.71  
2023 SUMMER



Piccadilly Circus, London (photo by Miki TAKAHASHI)

## Contents

### 1 巻頭特集

JSPS London 春の英国・欧州日本人研究者交流会

### 6 センター長の英国観望

第8回 「いよいよ多彩な活動へ」

### 10 理研-RAL記念式典の開催

### 11 John. S. Fossey 教授記念シンポジウム開催報告

### 12 在英研究者の者窓から

第30回 香取 哲平

King's College London

### 14 英国の機関紹介

British Museum (大英博物館)

### 15 ぼりーさんの英国玉手箱

チャールズ三世の戴冠式

### 18 山田さんの徒然なるままに

第14回 「ChatGPT said No...」

### 20 離任挨拶

### 21 Events organised/supported by JSPS London

### 22 JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

Application Schedule for FY2023/2024

# 巻頭特集: JSPS London 春の英国・欧州日本人研究者交流会

巻頭特集

2023年4月28日～30日に「JSPS London 春の英国・欧州日本人研究者交流会」が開催されました。在英、在欧の日本人研究者7名がオーガナイザーとなり企画された本交流会では、50名以上の日本人研究者が集い、情報交換やネットワーキングが行なわれました。



参加者全員での集合写真

交流会は、オーガナイザーの開会のあいさつの後、日本学術振興会の事業説明をはさみ、オーガナイザー7名の研究や経歴についての紹介(フラッシュトーク)が行われました。その後、3名の招待講演者により講演が行われました。



坂内博子先生: 早稲田大学教授。専門は脳神経科学。2005年～2007年までフランスのパリ高等師範学校でポスドクとして活動後、帰国し、理化学研究所、名古屋大学、慶應義塾大学に勤務。2019年より現職。特別研究員PD・RPD経験者であり、第14回日本学術振興会賞受賞者。

## (講演概要)

出産、育児は人生で重要なイベントであるが、子供が生まれた後感じたのは、日本でも育児支援が活発化しているとい

うこと。学会でも最近は託児サービスなどがあり、新学術の予算でも託児サービスなど支払えるようになったのはありがたい。子育てに必勝法はなく、パートナーとよく話し合っ、お互いの意思を言語化することが大事。

キャリアを進める上で、どこまでやってもボスの後追いにしかならない、と焦っていた時期があり、研究アイデンティティの危機を感じていた。そのような時は、一旦違う分野にも目を向けてみると、進む道が開けてくることがある。研究集会や、合宿形式のシンポジウムに参加することは有用。学会のオーガナイザーなどになると、周りから注目される。学術変革領域やさきがけで研究集会等に参加するとよい。

任期切れと、ラボの閉鎖が起こった際、次の職を探したが、業績だけでは決まらないことを理解した。就職活動は、能力の有無だけで決まるのではなく「マッチング」と言える。年齢なども考慮されるため、相手側にどんな人が必要なのか、確認することも重要。自分の振る舞いは、同じ業界の人には必ず見られているので気にするべきである。

帰国して就職したのは、配偶者の任期に合わせてのものだが、可能であればもっと長い期間海外の研究機関で経験を積みたかった。海外(フランス)と比べて日本の方が優れている点としては、フランスではボスの意向が絶対であるが、日本は比較的若手でも自由に研究できる環境にあると言える。





陽川憲先生：北見工業大学准教授。専門は植物生理学。2012年～2016年までボン大学でポスドクとして活動後、帰国し、首都大学東京、宇都宮大学に勤務。2018年より現職。特別研究員DC2・PD、海外特別研究員経験者。

#### （講演概要）

ポスドクではプリオンの研究をしていたが、天啓を得て植物に研究分野を変えた。今回のイベントと同様のイベントを、ドイツでポスドクをしていた時代に何度か企画しており、今回のイベントでも自分のノウハウを参加者に伝えたい。

36歳のとき、特別研究員PDの任期が終わって無職になった。それまでは何とかなる、と思っていたが、実際に無職になるとかなり精神的に追い詰められた。日本の学会などにそれまで参加しておらず、日本の大学にはコネがなかった。そのような事態にならないためにも、なるべく学会には参加しておいた方が良い。EUのマリーキュリーのフェロースHIP等に応募したが、採択されなかった。面白いのは、何度目かの不採択の際、「あなたは合格しませんでした合格すれすれでした」という証明書を発行してくれたこと。これは就職活動などの際、自分の能力を示すものとして利用できる。

就職エージェントに登録して、一般の就職活動もかなり行った。実際にとある大企業で最終面接まで残ったが、大学からも引き合いがあり、転職エージェントからは「任期付きのポジションと、大企業のポストでは違う。今を逃せば5年後にこんなチャンスはない。」と言われたが、最終的には研究がやりたかったので、宇都宮大学の先生から任期付きのポストの提案を受けて、大学でポストを得た。その後卓越研究員で北見工業大学に就職した。配偶者もずっと自分と一緒に研究者をしているが、受け入れてもらった。北見工業大学には大変良くしてもらっている。前述の転職エージェントの経験から、面接のコツについては詳しいので、伝授できる。



藤田夕希先生：Nutrient Management Institute(オランダ)のProject manager、研究員。専門は生態学、環境学、土壌学。京都大学で学士・修士号を取得したのち、オランダのワーヘニンゲン大学修士課程に留学。ユトレヒト大学にて博士号取得。2010-2019年まで環境系の民間研究所KWR(オランダ)に勤務。2019年より現職。

#### （講演概要）

私は大学でなく民間の研究所に所属している。出産・子育て期は負担が大きかった。産休後は配偶者と共にパートタイム勤務とすることで大変な時期を乗り切った。配偶者とはお互いに納得して負担を分けることが重要。育児期の苦しい時に抱いた恨みは一生残るものだ。

研究には様々なプロセスがあるが、自分は資金獲得や売り込むことが苦手。はじめに勤めた研究所はオールラウンダーを重用する傾向があり、違和感を感じていた。キャリア開発トレーニングを受けたところ、無理して自分を変えるより自分にあった環境に移動する方が建設的だ、というアドバイスを受け、転職を決意した。転職先の民間研究所には面接時から自分の適性と希望を具体的に伝え、ミスマッチを避けるようにした。

民間研究所は大学等と比べると研究の自由度に制限がある。チームとして成果を出すことを求められ、分業の意識が高い。評価基準も異なり、学術雑誌よりメディア発信や業界紙への論文掲載が重要となる。予算内でのプロジェクト管理、マネジメントが求められ、クライアントの話を聞く耳が必要になる。業界の時事動向を常にアップデートしなければいけない。

また、非母国語で働くハンディはやはり大きい。現在はオランダ語で業務をこなしているが、英語以上に大変である。しかし、現地語を話せると視野も可能性も広がるので、言語取得に時間を投資する価値はある。

ワークライフバランスについては、外注や簡素化をできると

## JSPS London 春の英国・欧州日本人研究者交流会

ころはする、勤務時間を調節するなど、自分にあった方法で負担を減らすとよい。オランダではヨーロッパの中でも抜きん出てパートタイム勤務者の割合が高く、私もパートタイム勤務を選択して余裕を持った生活を送っている。(日本でもパートタイムは多いが、日本のパートタイムの多くは非正規で不安定。)コロナ流行後はリモートワークが普及したので、より柔軟な働き方が可能になった。ヨーロッパは多様な働き方を許容しないという人が集まらない状況になってきている。

人生・キャリアにおいて何を成功とするかは、自分が決めることである。世間体や外野の意見に振り回されず、プライオリティを明確にして、それを実現する最適解を探すことが、幸せなキャリアを築くための近道だと思う。健康な心と体が何よりも大事なので、時にはフルギアで働く以外の選択肢もあるということを心の片隅においてほしい。

講演の終了後、参加者からの研究や経歴についての紹介(フラッシュトーク)が行われた後、テーマごとのラウンドテーブルディスカッションが行われました。

## ＜ラウンドテーブルディスカッションのテーマ＞

- ・イギリスでのフェローシップ、独立
- ・イギリスでの研究グラント
- ・ヨーロッパでの研究グラント、フェローシップ、独立
- ・起業情報
- ・日本帰国時の就職活動

一部のディスカッションについて、内容を簡単に紹介します。

## 【日本帰国時の就職活動:テーブルリーダー 坂内博子先生】

- ・自分のウェブサイトを持っていたら、相手もその人がどのような研究者か調べやすい。英語のウェブサイトがあると、海外でスピーカーとして招待される際にわかりやすい。英語で記載されているならばResearch map等でもよい。
- ・就職の際、教育経験なども聞かれるが、通常のポスドクには普通教育経験はない。その場合は、TAの経験やインターンへの教育をアピールするなどすればよい。
- ・日本では、入試であるとか、人のケアであるとか、研究以外の業務も多い。機関に業務内容を確認した方がよい。



ラウンドテーブルディスカッションの様子



## JSPS London 春の英国・欧州日本人研究者交流会

- ・就職は能力の優劣ではなくマッチング。採用されなくてもショックを受けなくてもよい。自分に合うところに就職すべき。
- ・日本に就職したい場合、学会等に出てアピールすることも必要。全く知らない人よりは、知っている人の方が有利。
- ・知り合いからのポストの情報伝達や、本来採用されるはずの人が何らかの理由で着任できなくなったので探している、という急に現れるポストもある。恩師のネットワークなども活用する。人間関係は重要である。
- ・英語で講義の経験があるのは良い。日本では英語で講義ができる先生は重宝される。

## 【イギリスでのフェローシップ、独立：テーブルリーダー 木下将樹先生】

- ・ヨーロッパではPhD取得から7年以内程度のERCのスターティンググラントに応募できるくらいの研究者が求められている。
- ・大体の進路は、フェローシップを取って大学で研究するか、レクチャーシップとして大学に就職するかどうか。フェローシップは自分の給与をそこから出すということで、大学に負担はなく、そのため大学から教育の義務を課せられない。レクチャーシップは当然講義などする必要がある。
- ・面接の際、教育理念などを問われることもあるが、通常のポスドクには教育経験はないので、今後勉強します、でもよい。
- ・ヨーロッパは採用が決まるまでが長い。早めに動き出した方がよい。
- ・ビザについて、JSPSのフェローシップを取っていると英国ではGlobal Talentビザが取れるので便利。費用も安く、必要書類も少ない。Skilled workerビザがとれるかはポスの裁量によるが、何も言わないと事務はSkilled workerの書類を用意する。PhDというだけではGlobal Talentビザは取れない。
- ・欧州では採用の際に求められる書類は少ない。プロポーザルは簡潔に記載すべきで、様式も自由で図なども入れてわかりやすくする。
- ・教育については、最初は大変だが、一年やって準備ができると後はそれほどでもない。教える期間も決まっている。出世するのであれば、教育の経験は役に立つ。研究メインであればそこまで必須でもない。
- ・言語について、英国は修士・博士課程は英語ネイティブの学生は実はそこまで多くない。逆に学部は英国人が多い。
- ・日本の大学で学生は、教える側にそこまで苦情を言っていないが、こちらの学生はDemanding。

ラウンドテーブルディスカッション終了後、男女共同参画につ

いて、世話人の安藤真一郎先生、小黒-安藤麻美先生より講演が行われました。

安藤真一郎先生：アムステルダム大学准教授。専門は宇宙素粒子物理学。2005年～2011年までアメリカのカリフォルニア工科大学でポスドクとして活動後、2011年よりアムステルダム大学に勤務。2015年より現職。特別研究員DC1、PD、海外特別研究員経験者。

小黒-安藤麻美先生：エクセター大学講師。専門は神経生物学。2008年～2012年までアメリカのカリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)で、2012年～2016年までオランダのユトレヒト大学医学センターでポスドクとして活動後、2016年より現職。特別研究員DC1、PD、海外特別研究員経験者。



男女共同参画についての講演

※ 講演の内容については、日本学術振興会のウェブサイト JSPS CHEERS! (<https://cheers.jps.go.jp/report/report19/>) に掲載されています。

最後に、男女共同参画について、テーマごとのラウンドテーブルディスカッションが行われました。

## ＜ラウンドテーブルディスカッションのテーマ＞

- ・パートナー両方のキャリア形成について(Two body problem)
- ・ヨーロッパ・イギリス・日本の出産/育児事情
- ・プライベートの時間の割り振り
- ・文化の違い・意識改革

一部のディスカッションについて、内容を簡単に紹介します。

## JSPS London 春の英国・欧州日本人研究者交流会

## 【パートナー両方のキャリア形成について (Two body problem): テーブルリーダー 渡邊(奈良) 郁子先生】

・パートナーのポストの関係で別居することになることなどあるかもしれないが、そのような場合は赴任先の大学に相談してみるのもよい。大学は柔軟に対応してくれる場合がある。

・研究キャリアに穴が開かないように、色々なサポートを受けてきた。困っているときは周りの人に「困っている」と言い、相談するとよい。周りに味方を作ることは大事。

・キャリアが綱渡りなのは仕方がない面もある。それは研究者でない夫婦でも同じ。

・キャリアにギャップがあると、日本では悪い風に行間を読んで、何か悪いことがあったように考えられてしまう。しかし海外ではむしろ、要点だけ書くことが求められる。

~~~~~

以上が29日の交流会の要約ですが、本交流会の開催にあたって、中日の29日が丸一日研究紹介やラウンドテーブルディスカッション等になるように日程が組まれており、初日は、小さなグループでの夕飯交流会、最終日はエクスカーションとすることで、旅程に幅を持たせ、移動時間に余裕を持たせており、子供を連れて参加者に対するキッズシッターサービスを手配するなど、研究者が参加しやすいよう配慮が行われておりました。最後に、講演をいただいた先生方とオーガナイザーのうち、小黒-安藤麻美先生、浅見拓哉先生より、コメントをいただきましたので掲載いたします。

## ◆坂内博子先生◆

欧州・英国で研究を精力的に行っておられる先生方にお会いできて、とても刺激になりました。今回のように多様な分野の研究者が集まって議論することは、学際的な研究を進めるため、また、新しいものの見方や考え方を取り入れるためにとっても重要です。オーガナイザーの皆様やJSPSに心より感謝申し上げます。

## ◆陽川憲先生◆

コロナ禍で3年ほど海外に出ることを制限されていましたが、制限解除後の初めてが今回のイギリスでした。6年もドイツでポスドクをやっていたにもかかわらず、ヨーロッパで頑張っている研究者の皆さんに触れて、自分もいつの間にか築いていたコンフォートゾーンを突破しなければ、と非常に刺激を受けました。今後とも交流を宜しく願います！

## ◆藤田夕希先生◆

交流会では多くの日本人研究者の方とお話でき、たくさんの刺激を受けました。楽しい時間をありがとうございました。皆さんのそれぞれが納得のできるキャリアを築けるよう、お祈りしています。

## ◆小黒-安藤麻美先生◆

この度は、本交流会の現地オーガナイザーとして、3日間にわたり、様々な分野で活躍する若手および中堅の研究者の方々と交流する機会をいただきました。日本を離れ、キャリアや研究の進め方に悩む日本人同士が互いに情報を交換することには、多くの意味があると感じました。本交流会では、試験的に以下の取り組みを行いました。まず、1) 冊子の広告費を募ることで参加費を低額に抑える取り組み、そして2) キッズシッターの導入により、夫婦で研究に取り組む方々の参加をサポートする取り組みです。交流会自体も概ね好評をいただき、こうした新たな試みも好意的に受け入れられたのではないかと考えております。本交流会にご参加いただいた皆様、講演者の先生方、そしてオーガナイザーの皆様、JSPSに心から感謝申し上げます。

## ◆浅見拓哉先生◆

当初20人くらい集まれば・・・くらいで企画し、参加者の募集を行いました。私達の想像より多くの方にご参加頂き、無事に開催できたことを世話人の一人として嬉しく思います。私を含めて、留学後のキャリアに対して不安を持つ若手研究者は多く、全員が同じ会場に宿泊することで夜通しざっばらんに話せる機会は貴重なものになったと思います。どの様な形になるかわかりませんが、また在英・欧州の研究者で交流できる機会があればと願っています。



30日のエクスカーションで訪れた霧に包まれたダートムーア国立公園

# センター長の英国観望

## 第8回 「いよいよ多彩な活動へ」

ロンドン研究連絡センター・センター長  
小林 直人



### 1. はじめに - 英国王の戴冠式と初夏の到来

英国の今年のこの季節の話題は何と言っても5月6日(土)に行われたチャールズ3世国王の戴冠式でしょう。チャールズ国王は、現在74歳で英国王室史上最高齢での戴冠となりました。ただ昨年6月のエリザベス女王即位70周年記念祝典(プラチナ・ジュビリー)に比べると、今回の戴冠式はTVや新聞などでもあまり大きく扱われず、その動きは随分静かなものでした。

また世論調査でも王室の存続を望む人は全世代を通じて2013年では国民の75%でしたが、2023年では58%に減っています。これを18歳～24歳の範囲に限るとそれぞれ64%と32%になります。そのような世論を勘案してか、今回の戴冠式は1953年のエリザベス女王の戴冠式から70年振りにも関わらず、小規模で簡素なものにしたようです。それでも英国全土で2,000万もの人がTVで戴冠式の様子を視聴したそうです。

実は私は5月6日の戴冠式当日は日本に一時帰国をしており、TVで式の模様を見ていました。あいにくの雨模様の天気でしたが、ウエストミンスター寺院での戴冠式を終えた後、馬車のパレードを経て、バッキンガム宮殿のテラスに国王一家が現れたのを見た時は、ホッとしました。多くの英国国民も同じような感慨を持たれたのではないかと思います。



図1. チャールズ国王の戴冠式(TVより)。

一方、今年もロンドンは春の訪れとともに花が咲き緑が繁り、5月半ばには早くも初夏の陽気になりました。私の住まいから徒歩10分ほどの所にあるプリムローズ・ヒルでは、多くの人々が集まって、休日の午後を楽しんでいました。

プリムローズ・ヒルは前号でご紹介したリージェンツ・パークのすぐ北にある標高78メートルの小高い丘で、ロンドン市街が一望できる人気スポットです。4月中頃のある日には、ここに電子ピアノを持ち込んでロックの曲を歌っている人もいました。

ビートルズの曲の中に「フル・オン・ザ・ヒル」という有名な曲があるのはご存知だと思いますが、実はこの曲はメンバーの一人ポール・マッカートニーがこのプリムローズ・ヒルを愛犬のマーサと散歩している時に、着想を得たというエピソードがあります。ポールはこの丘で他のいくつかの曲の着想も得たようで、ビートルズにとっては大変重要な丘だったそうです[1]。

ロンドンでは5月～6月は晴天が続き、湿度も少なく、気温もそれほど高くなく、最も快適な季節です。6月下旬には(まだ行ったことはありませんが)ウィンザー城西南のアスコット競馬場で有名なロイヤル・アスコット競馬が開かれますし、7月上旬にはテニスのウインブルドン選手権も開かれます。暗い冬を過ごすために、英気を養っておく良い季節だと言えましょう。



図2. プリムローズ・ヒルからのロンドン市街の眺望(5月下旬)。



## センター長の英国観望

### 2. 英国の大学の自律性

EUA (European University Association、欧州大学協会) という組織があり、定期的に欧州各国の「大学の自律性」に関する調査報告 “University Autonomy in Europe” を発表しています [2]。2023年には、その最新の調査報告が発表されたので、本稿ではそれに則して英国の大学の自律性の状況をご紹介します。

これは2007年、2011年、2016年に続いて4回目の調査になりますが、ここでは35の国または州にわたる大学の自律性の4つの側面（組織、財務、職員、学術）に関する調査結果が示されています。調査は文書提出と面談という2つの方法で行われました。

この4つの側面では表1の項目が調査対象項目として示されています。この項目の選択はNational Rectors’ Conferences (欧州各国での大学の学長が集まり、教育や研究の分野での協力や意見交換を行うために設立された組織) で議論され、助言委員会からの意見も参考にEUA理事会 (会長、理事会メンバー、および各国の学長協会の会長または指名された代表者で構成) で決定され、それぞれの項目について評点および重み付けがなされます。

評価は減点法で行われ、100%のスコアは、組織の完全な自律性を示し、スコア0%は、問題が外部機関によって完全に規制されていることを意味します。たとえば、大学が外部当局によって設定された上限の下で授業料を決定できるシステム (英国の場合はこれに該当) では、その指標に対して、60%のスコアが与えられます。「組織の自律性」については、執行責任者の選出

や権限、外部委員の参加、法人の設立などに関する大学の独自の決定が、「財政の自律性」については、公的資金・余剰金・授業料など大学の財政に関する自律性が、「職員管理の自律性」については上級アカデミックおよび上級管理職の採用・給与・解雇・昇進などの自律性が、「学術的自律性」については、学生数・学位プログラムの導入や終了、その内容、大学の質保証を評価する者の選択に関する自律性などが、それぞれ含まれます。

これらの指標に関する評価の中で、35の国・州の大学が比較的高い自律性を示している項目が、建物の所有 (29件/35件)、執行責任者の選出手順 (24件/35件)、上級管理職の採用 (23件/35件) などです。逆に低い自律性を示しているのが、執行責任者の任期 (6件/35件)、上級アカデミックの給与 (6件/35件)、統治機関への外部委員の参加と選出 (7件/35件) などの項目です。

また表2には上記四つの側面における評価の結果とそれらの平均値を主要国 (州) 別に示します。(80以上を赤字、50以下を青字で示します。) これを見ると英国のイングランドおよびスコットランドは、それぞれ「組織の自律性」で100、「職員管理の自律性」で96など、群をぬいて高い自律性を示していることが分かります。それに対して、スイス、スウェーデン、ドイツ (ブランデンブルク州)、フランスなどは、特に「組織の自律性」に関する評点が低いことが特徴として挙げられます。さらにドイツの場合は財務に関する自律性も随分低い値を示しています。

英国の大学がどの4側面をとっても自律性が高い理由を複数

| 組織の自律性 / ORGANISATIONAL AUTONOMY |                       |
|----------------------------------|-----------------------|
| • 執行責任者の選出手順                     | • 統治機関への外部委員参加と選出     |
| • 執行責任者の選考基準                     | • 学術および管理構造の決定        |
| • 執行責任者の任期・解任                    | • 法人の設立               |
| 財政の自律性 / FINANCIAL AUTONOMY      |                       |
| • 公的資金の期間と種類                     | • 建物の所有               |
| • 余剰金の維持                         | • 授業料請求 (国民/EUの学生)    |
| • 借金                             | • 授業料請求 (EU以外の学生)     |
| 職員管理の自律性 / STAFFING AUTONOMY     |                       |
| • 採用 (上級アカデミック/上級管理職)            | • 解雇 (上級アカデミック/上級管理職) |
| • 給与 (上級アカデミック/上級管理職)            | • 昇進 (上級アカデミック/上級管理職) |
| 学術的自律性 / ACADEMIC AUTONOMY       |                       |
| • 学生数                            | • 学位プログラムの内容          |
| • 学生の選択                          | • 教育言語の選択             |
| • 学位プログラムの導入・終了                  | • 質保証評価者の選択           |

表1. 大学の自律性に関する評価項目。

|                 | 組織  | 財務 | 職員 | 学術 | 平均   |
|-----------------|-----|----|----|----|------|
| 英国 (イングランド)     | 100 | 89 | 96 | 89 | 93.5 |
| 英国 (スコットランド)    | 100 | 80 | 96 | 89 | 91.3 |
| スイス             | 55  | 72 | 91 | 72 | 72.5 |
| スウェーデン          | 59  | 56 | 97 | 67 | 69.8 |
| ドイツ (ヘッセン州)     | 77  | 35 | 63 | 88 | 65.8 |
| ドイツ (ブランデンブルク州) | 58  | 44 | 58 | 87 | 61.8 |
| イタリア            | 65  | 70 | 49 | 56 | 60.0 |
| フランス            | 57  | 44 | 44 | 42 | 46.8 |

表2. 欧州主要国 (州) の大学自律性の評価結果。



## センター長の英国観望

の大学関係者に質問をしてみました。その中で成程と思った回答は「英国の大学は政府より古いから」というものでした。確かに英国の大学の創立年はオックスフォード大学が1096年、ケンブリッジ大学が1209年、セント・アンドリュース大学1410年、グラスゴー大学が1451年、エディンバラ大学が1583年と、軒並み英国の近代民主主義の発祥である1642年のピューリタン革命や1688年の名誉革命よりも古い歴史を有しています。特に伝統的であるオックスフォード大学とケンブリッジ大学は、広範な自治と決定権を有し、元来教養教育を教授することで社会の頂点に立つ人材を育成することが目的であったことは有名です[3]。さらに20世紀以降に設立された新たな大学を含めて、英国の大学全体の高い自律性は大いに注目すべきことでしょう。

秦由美子氏によれば「英法上、大学は教員・研究者集団による私的団体とされ、別の言葉でいえば法人格を備えた法人(corporation)であり、独立した団体としての人格を認められており、国から独立した私人(私立)であると考えられる。そして団体や法人であるということは、その本質において独立的存在体であり、自治権を享受するということになる。このことは、国家・王権や地方政府から法制上ないし機構上独立しているということの意味する。つまり大学は、学長(Vice-chancellor)を首長とする独立的地位と独自の学位授与権を有するプライベートな高等教育機関と考えられる[3]。」ということであり、このことが英国の大学が欧州の他の大学に比べて自律性が高い理由であると言えます。

### 3. 大学訪問(グラスゴー大学とエディンバラ大学)

3月の初旬にスコットランドのグラスゴー大学とエディンバラ大学を訪問し、JSPSロンドンの活動紹介やフェロローシップ・国際共

同研究に関する意見交換を行いました。

グラスゴー大学は前述の通り1451年創立で、スコットランドでもセント・アンドリュース大学に続いて2番目に古い大学です。蒸気機関の改良や電力単位のワット(W)で知られるジェームズ・ワット、「国富論」を著したアダム・スミス、物理学者のケルヴィン卿(ウィリアム・トムソン)など歴史上の重要人物も多く輩出しています。今回の訪問では、Dean for Global Engagement (China / East Asia)である Konstantinos Kontis教授のリードで、同大学の研究者や国際担当のマネージャー(計17名)との意見交換を行うことができました。

中でも多くの研究者の方々が日本との国際研究協力の意義を高く評価されていたことが印象的でした。東京大学、早稲田大学、東北大学、長崎大学など10大学以上との研究協力に加えて、J-Park、JAXA、NTT物性基礎研究所、三菱重工、東芝なども訪問したことがあるなど、多彩な連携の実績をお聞きすることが出来ました。

また「若い世代にJSPSの提供するプログラムについて周知することが重要となるのではないか」、「二国間交流事業や研究拠点形成事業は、各国で審査をして、それぞれ助成金を得なくてはならないところが複雑でハードルが高くなっている」、「大学としても共同研究における戦略的議論を行う機会を増やしていきたい」などの意見を頂きました。

一方、エディンバラ大学では化学研究科のNeil Robertson教授に出迎えて頂きました。エディンバラ大学も創立が1583年で、英国では6番目、スコットランドでは4番目に古い大学です。また各種の大学ランキングでも評価が高く、英国を代表する優れた研究大学の一つです。主な卒業生の一人に、古典電磁気学を確立したジェームズ・クラーク・マクスウェルがいます。



図3. グラスゴー大学での会合に参加の方々。左側から7人目が Kontis教授。

## センター長の英国観望

ここでもJSPSの活動を紹介しましたが、研究拠点形成事業やWPI(World Premier International Research Center Initiative)への関心が高く、参加するにはどのようにすべきか、純粋数学でも参加できるのか、などの質問がありました。またその後、日本との共同研究経験のある8人の理工学部の研究者と個別に話し合いを行いました。どの研究者も日本の研究者との共同研究の高い意義を述べていました。また若い学生に日本で研究をさせたいので是非サポート体制を充実してほしい、などの要望が寄せられました。

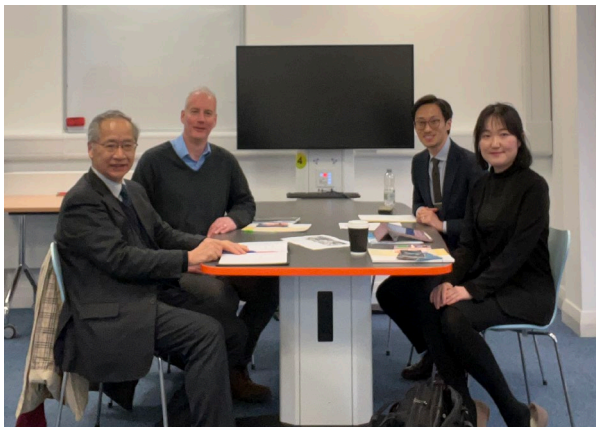


図4. エディンバラ大学でのNeil Robertson教授との意見交換。

### 4. フロイト博物館

私の住まいから北に15分程度歩いたハムステッドという所に「フロイト博物館」があります(地図参照)[4]。ここには精神分析の創始者として有名なオーストリアの医師・心理学者のジークムント・フロイト(1856~1939年)が生涯最後の1年間を過ごした家が残っていて、その当時の姿のまま博物館となっています。



図5. フロイト博物館の地図(左)、と博物館の外観(右)

ジークムント・フロイトは1856年5月6日に当時のオーストリア帝国(現在のチェコ共和国)のプラハでユダヤ系の家庭に生まれ、後に医学を学ぶためにウィーン大学に進学しました。初めは生物学を専攻しましたが次第に神経学に興味を持ち、ウィーン総合病院で神経学の研究を開始しました。その後、人間の心の中に存在する無意識の領域や心の仕組みを探求したり、また夢分析を通じて患者の心の中に潜む問題を明らかにする手法を開発しました。フロイトの理論は次第に社会に広まっていきましたが、彼はユダヤ人であったためナチスによる迫害を逃れて1938年6月にロンドンに亡命しました。そこで診療を再開し、精神分析療法を提供するなど、死ぬまで活動を続けました。

またフロイトの三女のアンナ・フロイト(1895~1982年)は父から精神分析を学び、ロンドンでは特に児童心理学の専門家として活躍し、父の遺した同じ家で生涯を送りました。フロイト博物館の外壁には2枚の青の銘板(ブルー・プラーク)が貼られていて、それぞれ「精神分析学創始者のジークムント・フロイト」と「児童心理分析の開拓者アンナ・フロイト」の名が記されています。

ロンドンでは、このように静かな住宅街の中に、何気なく世界的な名人の暮らしていた住まいや博物館があり、訪問することが散歩の楽しみの一つです。機会があれば他の例もご紹介したいと思います。

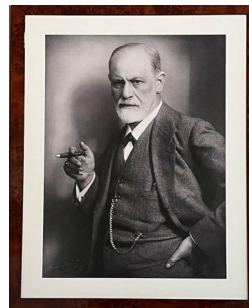


図6. ジークムント・フロイトの写真(左)と書斎(右)

### 参考文献

- [1] <https://www.songfacts.com/facts/the-beatles/the-fool-on-the-hill>
- [2] <https://eua.eu/downloads/publications/eua%20autonomy%20scorecard.pdf>
- [3] <https://www.rijue-japan.org/pdf/ukuniv.pdf>
- [4] <https://www.freud.org.uk/>



## 理研—RAL記念式典の開催（2023年3月14日）

2023年3月14日にオックスフォード近郊のRAL (Rutherford Appleton Laboratory) で、30年以上にわたる理研—RALミュオン施設の研究協定終了に伴う式典が行われ[1]、JSPSロンドン研究連絡センターからも3名が参加しました。記念式典では、この施設の創設期から関わられた理化学研究所の永嶺謙忠先生を初め、関係の研究者からこの施設から生み出された多くの研究成果に関する講演があり、その共同研究の高い意義が強調されました。

英国科学技術施設評議会 (STFC) RALのISIS\* 中性子およびミュオン\*\* 源は1984年に設立され、ミュオン分光法と中性子散乱の技術等を使用して、原子から高分子に至るまで顕微鏡スケールで凝縮した電子状態の構造やダイナミクスが調べられてきました。一方、理研では1980年代から永嶺謙忠先生を中心にミュオンの研究が行われていましたが、RALからの申し出もあり1990年に両研究機関の間で研究協力協定が締結されました。それ以来3回協定が更新され、最も新しい協定は2018年に締結され、2023年3月末で終了しました [2]。

この国際研究協力の過程で、2500回以上の実験、世界中で50以上の研究グループとの共同研究、500報以上の論文発表が行われました。特にその中で「銅酸化物高温超伝導体の磁性と超伝導の相関の解明」、



図1. ISIS中性子およびミュオン施設の模型。左が加速器、ほぼ中央に理研の施設がある。



図2. 記念式典でご挨拶をされる永嶺先生と出席者の方々。

「ミュオン触媒核融合の観測」、「電池材料の中のイオン拡散率測定」、「メモリー・デバイス中でのミュオン誘起シングルイベントの測定」など数々の画期的な研究成果が得られました。

記念講演の中でISIS副所長であるフィリップ・キング博士は、次のように述べられました。「理研とISISは30年以上にわたり、基礎研究、凝縮系物質や物理化学の研究、電池材料の応用研究など、ミュオンを利用した幅広い科学で協力を行って来ました。今日の式典はある意味で一つの時代の終わりを告げるものですが、両機関は今後も研究協力を続け、ISISは今後も日本の利用者を歓迎します。理研とRALとのパートナーシップは、英国と日本の科学協力の中でも最大かつ長期的で、最も成功した事例の一つです [1, 2]」。

なお、今後に向けて理研・仁科加速器科学研究センターとRAL・ISISとの研究協力のさらなる発展をめざし、櫻井博儀仁科加速器科学研究センター長とロジャー・エクルストンISIS所長の間で新たな研究協力協定の調印が行われました。

このように30年以上の長期にわたり続いた日英の研究協力が両国の科学技術の発展に大きな貢献をしたことは大変貴重なことと考えられます。関係者の皆様のご努力に敬意を表するとともに、このような機会が今後もさらに増えることを願っています。



図3. 理研・仁科加速器科学研究センター長とRSL・ISIS所長の間での新たな研究協力協定の調印。

- (\*) ISIS は英語の頭文字を取った要約形ではなく、古代エジプトの女神の名前。
- (\*\*) ミュオンは素粒子の一つで、平均寿命  $2.2 \times 10^{-6}$  秒で電子・ミューニュートリノ・反電子ニュートリノに崩壊する。その種々の特性や相互作用を観測することによって色々な物質の物理的・化学的情報を得ることができる。

### 【参考文献】

- [1] [https://www.riken.jp/pr/news/2023/20230317\\_1/index.html](https://www.riken.jp/pr/news/2023/20230317_1/index.html)
- [2] <https://www.isis.stfc.ac.uk/Pages/Honouring-over-30-years-of-partnership-between-ISIS-and-Japan.aspx>

## John. S. Fossey 教授記念シンポジウム開催報告(2023年3月29-30日)

2022年4月に亡くなられた JSPSイギリス・アイルランド 同窓会の前会長であるJohn S. Fossey教授を記念するシンポジウムが本年3月29～30日にバーミンガム大学で開催されました[1]。



図1. J. S. Fossey教授(2019年4月)。

Fossey教授はウェールズにあるカーディフ大学で化学を

学び2000年に卒業後、2004年にJSPSの外国人特別研究員事業に採択されて東京大学で研究をされました。その間に奥様と出会い、2005年に英国に戻りバース大学に着任されました。2008年にバーミンガム大学で独立研究者となり、2018年には同大学の合成化学の教授に就任されました。またこの間2010年にはブリッジ・フェローシップを得て再度日本で研究をされています。このようにFossey教授にとって日本での研究は大変貴重な経験となったようです。

最初の日本での研究を終えた後、Fossey教授は国際共同研究や国際ネットワーク形成への強い意欲を示され、日本や中国など東アジア全域との広範なネットワーク形成のための組織間の交流の強化に努められました。特に日本と英国の研究協力推進には長年貢献され、その模範的な勤勉さと献身により、2009年にはJSPSイギリス・アイルランド同窓会の執行委員会委員に選出され、2017年からは会長を務められました。その活動はJSPSの研究支援活動にとって極めて貴重なものでした。

今回の記念講演会はFossey教授の幅広い研究業績を讃える場に相応しく、「有機合成、触媒作用、超分子化学、分子センシングの祝典」と題して開催され、基調講演をされた東京大学の小林修教授を初め、世界中から30名近くの一流の科学者がFossey教授を偲び講演をされました。また2日間で100名近くの参加者がありました。

2022年2月にCovid19のパンデミックの規制が緩和後、JSPSロンドンセンターでは国際交流の再活性化にむけて真っ先にバーミンガム大学を訪問しましたが、その際にFossey教授とお会いすることが出来ました。先生は大学の構内の詳しい紹介に加えて、産業革命以来のバーミンガム市の歴史の話、特に英国中の運河が同市に集まっていること等大変印象深い説明をされました。

今回の記念講演会および懇親会の中で、多くの方がFossey教

授の思い出として、思いやりのある大変優しい性格の方で、多くの人に愛されていたことを述べておられました。このような素晴らしい方のご逝去に改めて心よりお悔やみを申し上げますとともに、今後益々JSPSイギリス・アイルランド同窓会が発展するよう支援することが我々の責務だと考えています。



図2. 2022年2月のバーミンガム大学訪問。右手奥がFossey教授。



図3. 記念講演会に出席された研究者の方々。



図4. 懇親会冒頭での小林センター長からの追悼と感謝の辞。

## 参考文献

- [1] John S Fossey Memorial Symposium  
<https://www.birmingham.ac.uk/schools/chemistry/news/events/2023/john-fossey-symposium.aspx>



# 在英研究者の 者窓から

## 第30回 Department of Physics, King's College London 香取 哲平

### 略歴

2002年東京工業大学物理学科卒業  
2008年インディアナ大学ブルーミントン校で博士号取得  
MITにて5年間のポスドクを経て、2013年にロンドン大学クイーンマリー校でLecturer(助教に相当)に着任、  
2019年からキングス・カレッジ・ロンドンにてreader(准教授に相当)。専門は素粒子物理実験。  
イギリス物理学会天体素粒子物理グループ座長。  
Twitter@teppeikatori

**Dr Teppei Katori**  
Reader  
Department of Physics,  
King's College London



### 初めまして、香取哲平です！

キングス・カレッジ・ロンドンのReader(准教授に相当)の香取哲平です。専門は素粒子物理実験で、日本のスーパーカミオカンデ等で研究しています。東京工業大学の学部4年の時に、アメリカ経験がある研究者の叔父から海外だと大学院生に給料が出る、お前が研究者として成功するかどうかは知らないけれどとりあえず英会話教師くらいにはなれる、と聞いて海外留学を目指しました。大学時代はサッカー一部で、英語が得意だったり勉強に熱意があったわけではないのですが、海外に出るとということには非常に魅力を感じました。いわゆる有名大学は全部落ちましたが、一つだけ受かったアメリカのインディアナ大学の大学院に進み、卒業後知り合いの教授からポスドクに誘われて、MITに行きました。当時から目立ちたがり屋であり、自分のCVやキャリア形成には気を使っていました。というのも素粒子物理実験で重要な解析等はだいたい有名大学の学生で占められており、僕は常に自分の研究の重要性を自分で説明して発信することを心がけていました。大方の海外出たがり屋と同じように、日本の風習にはあまり従わず、「人事を尽くして天命を待つ」といった考え方や、アジア人は人の2倍頑張ると1.2倍くらい認められる傾向がありますが、そういう待遇も受け入れられない方です。ポスドク5年目から本気で仕事探しにかかり、市場にある全てのアカデミックポジションに応募しました。といっても素粒子実験物理のテ

ニュアトラックのジョブで僕の分野にマッチするものは非常に少なく、全世界で年間たった10件くらいでした。しかし数件は面接まで進み、最初にオファーをくれたロンドン大学クイーンマリー校に他の結果を待たずにlecturer(助教に相当)として就職しました。当時はカウンターオファーを知らなかったのですが、今だったら絶対にそれを取りにいったと思います。クイーンマリー校の面接の時に初めてイギリスに来たので、別にイギリスに興味があったわけでも住みたかったわけでもありません。人から誘われたり勧められたら迷わず取る方として、2019年にニュートリノ研究をしていた同僚と共にキングス・カレッジに誘われ、今に至ります。

### 人生最大の難関は海外外人カップルの子育て！

僕がアメリカのインディアナ大学に留学した当時はまだインターネットがそこまで普及しておらず、寮の予約なども国際電話で行う必要があり、僕の英語力では完全に不可能でしたので、とりあえず着の身着のまま現地に行きました。英語の会話は全くダメで、最初の3年間くらいは仕事以外で特に人と話した記憶がなく、カルチャーショックも大きく大変でした。しかし、それ以上に大変な出来事は出産、子育てだと思います。嫁はアメリカ人で僕以上にハチャメチャな人生を送っていた人で、家庭とか安定とは無縁のような人でしたが、何故かイギリスに来て子供が出来ました。

## 在英研究者の者窓から

実はそれ以降ペースが取り戻せていません。つまり仕事とプライベートの両立が全く出来ていません。みんなどうやって両立しているのか知りたいくらいです。

まず、最初の2年間は子育てのために嫁は完全に家に引き籠もりました。彼女の給料ではchild careは到底払えません。この期間は厳しく、確か1日の全出費を17ポンドくらいでやりくりしていたと思います。まさにスターバックスでコーヒーが飲めない状態でした。東ロンドンに住んでいたため、大きい公園が近かったのが唯一の救いでした。かといって僕が大学にずっといるわけにもいかないので、定刻に帰ります。これが辛いところで、結局多くの研究が通常の時間外で行われているということをも身をもって知りました。今まではダラダラ一日中オフィスにいて、学生と喋ったり、論文を読んだり、計算をしたりしていましたが、実は朝9時から夜5時まではミーティングや学生指導など、人と会う仕事メインで、自分の時間というのは5時以降しかありませんでした。そういうわけで、子育てで最初に犠牲になるのは自分の時間、つまり何かを自分で書いたり、読んだり、計算したりする時間です。非常に重要なもの、例えば予算の申請書の作成等はなんとか時間を作りますが、人の論文を読んだりする時間はほとんどなくなってしまいました。どうやらこの時間は永久になくなってしまったらしく、今では通勤時間や週末に細々と人の論文を読んだり、自分で計算したりしています。イギリスでは共働きの子供は2歳からタダで幼稚園に入ることができるので、この頃から経済的には回復し、パンデミックを機にロンドン郊外に家を購入、移住しました。



写真: "Particle Shrine" at Science Gallery London (筆者右)。素粒子業界誌、Symmetry Magazine でも特集されました  
<https://www.symmetrymagazine.org/article/feeling-the-universe-in-the-particle-shrine>

### 研究その他

時間がないわりには人にはよく会います。定刻に帰るよう心がけていますが、人に会う事は常に例外です。それは、思いがけない出合いが新しいことにつながるのを身をもって経験しているからです。最近始めた新しい素粒子検出器の開発は、たまたまパブで一緒に飲んでいたら全然分野の違う人と行っていますし、天体物理の研究も友達つながりから始まりました。イギリス物理学会のイベントにはよく顔を出しますが、そこで知り合った人と物性の研究で有名なISIS Neutron Source (Rutherford Appleton Laboratory) を使った素粒子物理のための研究も始めました。JSPSの会合も誘われるがままに出席して、本稿の寄稿を依頼された次第です。最近ではアメリカのミュージックフェスで知り合ったミュージシャンとのコラボで、Science Gallery Londonで大掛かりなart & scienceのインストレーションも行いました(写真)。新しいことを始めるドキドキ感とワクワク感に勝るものはなく、それを常に感じられる研究者の職は最高だと思います。研究者以外の友達にもよく会います。今、自分の1週間を省みると、全然定刻に帰っていないので、欧米型子育て分担万能のように語っていたのは実は全然大したことがないのがよくわかります。当然奥さんには頭が上がりません。

### 最後に

素粒子実験物理の予算はUKRI傘下のSTFC (Science and Technology Facilities Council) にほとんど依存していて、かつ日本の運営費交付金に相当するConsolidate Grantはグループで申請するので、読者の皆さんは興味がないと思うので割愛します。やはり学生を雇うお金を獲得するのが至難の技で、これにかなり労力を費やします。Junior lecturerから10年近く経ちますが、指導した博士課程修了の学生はまだ3人だけです。この業界で思うのは、なかなか必勝策のようなものがなく、自分で色々な人に会い、話を聞いて、自分で判断し行動することが重要みたいです。僕自身もまだまだ修行中の身ですが、ここに自分の経験と、そこから学んだことを羅列しました。楽しんでいただけたら幸いです。



## 英国の機関紹介

### British Museum (大英博物館)

#### 博物館学

幼稚園の夏休み、お気に入りの麦わら帽子を被り、大好きな祖父母に手を引かれ、上野の国立科学博物館で恐竜の骨格標本を見たのを今でも鮮明に覚えています。「恐竜」がはじめの第一歩でしたが、今では旅行に行くとき必ず現地の博物館や美術館に足を運ぶようになりました。大学職員になり、所属大学に「総合研究博物館」や「資料館」等外部に公開している施設が多々あり、またそこでは所属学生が博物館経営論や展示論学等を受講し、実習を積めば学芸員になれる講義があり、学問として確立されていることを初めて知りました。

「博物館学」とは、博物館や美術館を管理運営し、展示品・収集品を充実させ、どう発展させるか研究し、また実際にその活動を生かしていく手立てのことであるそうですが、周辺学問領域にはもちろん文化史や美術史、科学史、物理学や生物学等があり、人類が歩んできた歴史すべての学問領域に通じるものがあると個人的には思っています。

#### British Museum

British Museum「大英博物館」は、世界に名だたる博物館の1つであり、世界で最初の国立博物館です。800万点ものコレクションを有し、それは現存するものの中で最大かつ最も包括的なものであり、人類の文化の始まりから現在までを記録しています。ただ、我々が見ることができる、常設展示されているものは全コレクションの1%程度だそうです。大英博物館を限らずに見尽くすのにどれだけ時間がかかるのかを考えると、800万という数字がいかに莫大なものであるか痛感します。

また大英博物館は、別名「泥棒博物館」と呼ばれることもあります。ロゼッタストーンやラムセス2世の巨象、パルテノン神殿の彫刻、イースター島のモアイ像等古今東西からなる貴重なコレクションの幾つかは、戦争や植民地からの略奪品とされているからです。エジプト政府等は現在も返還要求を出しているそうですが、今なおロゼッタストーンが大英博物館に飾られていることを考えると、結果は言わずもがなでしょう。

#### Making art together in Japan 1780–1880

大英博物館においても、日本関連の研究が存在します。大英博物館、ロンドン大学SOAS、立命館大学、関西大学、京都国立近代美術館の共同研究で「Making art together in Japan 1780–1880」というプロジェクトがあります。江戸時代後期における版本、絵画、摺物をデジタル化し作品や制作者を分析す

ることにより、文化的サロンのような集団形成の中で絵画・詩歌が発展していたのか、もし文化的サロンが存在したのであればその文化的集団の参加者の解明、文化的サロンと社会の繋がり等を理解し、そうした活動を通じて生み出された芸術作品の解釈や表現にどのような影響があったのかを研究されているそうです。2024年には大英博物館にて該当研究の展示を行うようですので、興味のある方はぜひ足を運んでみてください。

また北斎の浮世絵はここイギリスでも人気を博しているようで、お土産ショップには北斎のポストカードなんかも販売しています。(個人的にはなぜ?と思いますが、まあ折角なので1つゲットしました。)

#### 終わりに

博物館や美術館を訪れる醍醐味は、もちろん目の保養!だけでなく、コレクションの背後にある文化的、歴史的背景を考えることだと思います。なぜイギリスの大英博物館には古今東西からなるコレクションが莫大な数収められているのか、なぜ過去、大英博物館にてコレクションの杜撰な管理は行われてしまったのか。1点1点のコレクションが現状の形で、今この場所にある理由を考えるだけでも、博物館や美術館を訪れる価値のひとつになると思っています。

ロンドン市内には、大英博物館だけでなくヴィクトリア・アンド・アルバート美術館や自然史博物館、ナショナル・ギャラリー、ちょっと個人的に気になるフリーメイソン博物館等たくさんの博物館があります。常設展示はなんと基本的にFree entry!

ロンドンを訪れた際には、素敵な観光名所巡りだけではなく博物館巡り、などもいかがでしょうか。



Queen Elizabeth II Great Court

## ぼりーさんの英国玉手箱

～ 日本人の素朴な疑問に英国人ぼりーさんが答えます ～



Polly Watson

ロンドンセンターのローカルスタッフ。  
本コラムを通じ、英国の魅力をお伝え  
できたら嬉しいです。

チャールズ3世の戴冠式が先日ありました。英国の反応や今後の英国王室等に関して教えてください。

チャールズ国王の戴冠式は2023年5月6日(土)から3日間行われました。月曜日はバンクホリデーとなり、国民も3日間一緒にお祝いできました。一日目は戴冠式、二日目はコンサート、三日目はBig Help outというボランティア活動に関するイベントという構成でした。まずは豆知識として、英国の戴冠式は紀元前973年にロンドンでなくバースで行われたエドガー王の戴冠式の儀式がその後の行われた数々の戴冠式の原型となっているんですよ。戴冠式としては71年ぶりで、一日目はあいにく雨が降り、寒い日でしたが、英国中はもとより世界から人々が歴史的なイベントを目撃しようと押し寄せてきました。昨年行われた故エリザベス女王の在位70年をお祝いするプラチナジュビリーでは参加者が8,000人だったのですが今回は2,000人、またロンドン市内を馬車で回るルートも大幅に縮小されました。王冠や玉座は修復され再利用されており、それらの点からもこの3日間の戴冠式は効率性と持続可能性が強い印象を受けました。



宝珠と十字架の付いた国王の笏を持つチャールズ国王(英国王室公式HPより)

1日目の戴冠式、私はテレビの前から参加しました。戴冠式の感想としては昔の伝統と現代らしさを取り入れ、良く調和された演出であったと思いました。特に音楽に関しては顕著でした。例えば1727年のジョージ2世の戴冠式から必ず使われているヘンデルの“司祭ザグト(Zadok the Priest)”が演奏され、一方で、“キャッツ”、“オペラ座の怪人”で数々のヒットを生んだAndrew Lloyd Webber 卿がこの日のために書き下ろした戴冠式賛歌や、初めて存命中の作曲者として殿堂入りを果たしたDame Debbie Wiseman 女史による高揚感のある新作等、まさに古典と現代音楽の総合的な融合の演出は圧巻でした。

その他の現代的な演出として、枢密院議長・下院院内総務であるPenelope Mordaunt氏(Rishi Sunak氏と最後まで首争いをした人物)は国王に宝石で飾られた“献上剣”を献上しましたが、この役が女性初というところがとても現代的でしたね。

また今回はこれまで式では定番だった貴族の敬意(homage to peers)はなくなりました。これは侯爵等の高貴な身分の人々が君主に忠誠を誓うものですが、今回は、国民も国王に対して敬意を払えるようになりました。つまり家にも王に対して敬意が払われるというオープンなものでした。女性の司祭も登場しましたね。71年前では考えられないことです。

またチャールズ国王は以前から信仰の擁護者であると同時に、様々な信仰の擁護者でありたい(defender to the faiths)と述べていることから、式の最後の方で様々な宗教の代表者がチャールズ国王の戴冠を祝福する場面もあり、またヒンドゥー教徒であるRishi Sunak 英国首相が聖書の一部を朗読する場面もあり、英国の”今“に沿ったものと感じました。もちろん古い伝統も残されていました。Church of England の大司教による儀式、王笏、宝珠等の使用、また王の象徴である王冠は聖エドワード王冠といわれ、これまでに7人の国王が使用しました。



## ぼりーさんの英国玉手箱

同日王妃となったカミラ王妃の王冠はメアリー王妃の戴冠式に使われた王冠でした。英国の財産ともいわれる宝石類は普段Tower of Londonで保管されており、一般公開されています。それから聖油を国王の頭に注ぐ儀式もありましたね。衝立が登場して直接は見られませんでしたね、この聖油はオリーブ油でエルサレムの聖職者の祝福を受けているものなんですよ。

式後は金の馬車に乗ってバッキンガム宮殿に戻り恒例である宮殿のバルコニーからの初お披露目がありました。バッキンガム宮殿前から通じるマルの通りは雨にも関わらず予想以上に大勢の人でいっぱいでしたね。王室のお祝い事で恒例な祝賀飛行はお天気の関係で利用された飛行機数が大幅に減ったことは残念でした。実はこの飛行に使われる飛行機は私の家の近から離陸するんですよ。当日もいつ出発するかと空を見上げて待っていたのですが、天候が悪く見るできませんでした。今回、戴冠式に招待された人々は、侯爵や伯爵だけでなく、チャリティー、NHS、救急隊等公共サービスの関係者で人々に奉仕をしている一般の人たちも招待されていました。ちなみに前の戴冠式に関係した人の関係者は招待されるという1377年のリチャード3世の時代からの習慣もあり、それを証明すれば招待状が来たようです。実際に何が証拠となって招待状が発送されたかわかりませんが、なんせ71年前ですからね。

私個人として、戴冠式でとても印象に残ったものは戴冠式が行われたWestminster Abbyに飾られた花々です。英国各地の農園で栽培された120種類以上の季節の花々が戴冠式を彩りました。飾られていた花々にはそれぞれ花言葉があり、例えばローズマリー(花言葉: 美德)、カウスリップ(青春の思い出)、ブルーベル(愛)、水仙(騎士道精神)等々幸せで積極的なシンボルを意味していたんですよ。



戴冠式を彩った花々(英国王室公式HPより)

2日目は夜のコンサート。こちらテレビで見ました。特に期待していなかったのですが、意外と良い内容で感心しました。まず建立1,000年近いウインザー城が初めて公開コンサートの場所として利用されました。お城がライトアップされ、英国だけでなく米国等からもアーティストが集まりました。主なテーマは国王のこれまでの生涯を表現し、英国軍隊の役割、国王の芸術(絵画、劇場、音楽、ダンス)に対する造詣、自身が成立した慈善団体 Prince Trust、チャールズ国王は長年の環境保護主義者でもあり、最新技術を駆使したドローンのショーでは自然界の様々な動物等を表現していました

3日目は、Big Help Outというボランティア活動に焦点を当てた日でした。私も当日は近隣の教会の活動に参加して、フードバンクでお手伝いをしました。現在の英国で毎日のように言われているcost of living crisis (生活費の危機)のためか、多くの人が教会に来て、必要な食料品を求めています。本当に悲しい状況ですね。でもお互い助け合うことが大切だと思います。午後は自治体が主催するイベントがあり、家族で参加しました。ライブミュージックあり、屋台ありで、自分たちで持ち寄った食べ物をシェアするちょっとしたストリートパーティーも開かれていました。そのほかにも、子供たちのためにメイポールダンスもやっていました。また子供達には記念としてコインが渡されていました。そのコインの表はチャールズ国王の顔、裏はその町の名前と日付が入ったものでよい記念品となりました。



May Pole Dancing

## ぼりーさんの英国玉手箱

さて、これからの英国王室ですが、様々な課題があると言われています。例えば今回の戴冠式を祝う公式行事が全国で3,713件、そして616件のストリートパーティが行われましたが、そのうち2,000件以上が君主制の支持が最も高い富裕層がいるロンドンで行われました。ちなみにスコットランドでは約70件、ウェールズではわずか30件でした。特にウェールズでは反発が高まってきており、また現在、生活費上昇の危機の中にいることを考えると、戴冠式が地方議会の資金の賢い利用法ではないという意見が大半です。そのような論争があるため皇太子夫妻 (Prince and Princess of Wales) の叙任式は今のところ計画されていません。

また英国の若者は王室の廃止を願う傾向があり、戴冠式当日も首都のカーディフの野外一般観覧に多くの人が集まったのですが、その周りではそれ以上の人数が王室に対するデモを行っていたと聞きました。スコットランドのグラスゴー周辺では戴冠式当日に実施された“独立行進”に2万人が集まり、スコットランドの独立を訴えていました。また以前から言われているのですが、連邦国(Commonwealth)との関係は大変難しくなるでしょう。戴冠式が明けてからいきなり連邦国の一つであるジャマイカが2024年に英国王室からの独立を問う国民投票を実施することを発表しました。連邦国にはカナダ、オーストラリア等の国もありますが、聞いたことのないような南太平洋上やアフリカの国もあり、その力関係や、かつて英国による植民地時代の奴隷制度等の名残りを未だに引きずっており、すぐに解決できるものではありません。

チャールズ国王は、今後王室の縮小と近代化を図ることを目標としており、その目標はぜひ続けていただきたいです。またチャールズ国王には、過去の不倫・離婚等のスキャンダルがあるためよく思わない人もおり、世界中から尊敬され続けた母親と比較される傾向にあります。確かに故エリザベス女王は第二次大戦後からの義務や犠牲が重視された時代を乗り越えて、世界中から尊敬される人となりました。しかし残念なことに、チャールズ国王は分断された不平等な時代に君主となり、英国連合の至る所で政治情勢の変化が起こり、和解をするには様々な大きな課題に直面しなくてはいけない状態です。英国の10年間に渡る緊縮財政、公共サービスの大幅削減、コロナの流行、EU離脱など等が、原因となり、英国のインフレ率は他の先進国が経験しているインフレ率より高いといわれています。そのような

状態の中にいる王室ファミリーの贅沢な暮らしぶりや、所有している城や宮殿が必要なのか、世襲制が今の時代に沿ったものなのか、というところでいろいろ議論されています。個人的にはチャールズ国王の一族英国王室が社会のためにできることを中心として、自分の与えられた特権を超え、世界の不平等という難しい問題に取り組んでもらいたいと思っています。またチャールズ国王が設立したPrince Trustを通じて、自然環境の保護の取り組みを続け、英国だけでなく英連邦の国々の若者にスキルと希望を与える活動も続けてもらいたいです。



戴冠式の紋章 (英国王室公式HPより)



Coronation Coin



# 山田さんの徒然なるままに

～ JSPS London 現地職員が贈る、知られざる英国を様々な視点から語る痛快エッセイ ～

## 第14回

## 「ChatGPT said No...」

先日BBC Newsのサイトでこんな記事があった。Cardiff University の学生 Tom(匿名)が1月に2,500文字の2つのエッセーを提出した。1つはChatGPTの助けを借り、1つは助けなしで提出した。Tomは普段2.1の成績(100点満点で60点から69点ぐらいの成績)だという。今回の成績結果はChatGPTの助けを借りたエッセーは今までにないほど高成績だった。片や、助けを借りなかった方はいつもと同じような成績だったという。TomはAIからの回答を一字一句コピーしたのではなく、“より早く情報を得るような質問をした”ことで得た情報を基に作成したという。TomはうまくAIを活用しているようである。(ちなみにCardiff University ではChatGPTに関する大学の方針をガイドダンスとして近く発表する予定である。)

私も3月下旬にやっとChatGPTの登録ができ、何か聞いてみたいと思い試してみたが、まったくの予想外な結果となってしまったので、そのときの背景も含めてお話ししよう。

その質問とはイングランド・フットボール・プレミアリーグについてである。リーグ最高峰であるプレミアリーグのことを簡単に説明すると、リーグには20チームおり、勝利は3点、引き分け1点、敗北0点というポイント制で順位が決められていく。開催期間は8月から翌年の5月まで、期間終了時点でポイントの少ない下位3チームは次シーズンに格下のリーグ、チャンピオンシップで戦うことになる。(反対にチャンピオンシップから3チームが昇進してくる。)実は、今シーズン3月下旬時点で下位が団子状態で9チームも降格の可能性の危機にあった。私の推しのWolverhampton Wanderers(Wolves)は昨年12月のカタルW杯期間突入時に最下位で、その9チームに含まれていた。私はチームの勝敗に一喜一憂し、チームの将来が不安で、居ても立ってもいられないという状態であった。情報豊富なChatGPTはこんな状況にどう答えてくれるのだろうか、と大きな期待を持って質問してみた。そのやりとりが下記のとおりである。

### 山田 泰子

2016年からロンドンセンターに勤務。ドラマシリーズBreaking Badのスピノフ、Better Call Saulに夢中！今、Finalシリーズ絶賛観賞中、これで終了かと思うとなかなか次回に進めず、でもみたい！というジレンマに陥っています。



**私：イングランド・フットボール・プレミアリーグの今シーズンで降格するチームはどこでしょうか？** 当時の順位表

ChatGPT(以下C)：  
私自身はAI語学モデルで、将来を予想、憶測する能力を備えています。しかし、あなたの意思決定に役立つ情報を提供できません。イングランド・プレミアリーグは競争が激しいリーグでシーズンによって降格するチームは異なります。現時点でどのチームが降格するかを予想することは困難です。シーズンの経過に伴って発生する様々な問題点や成果、選手の怪我や移籍、そ

の他予想されていない事態等の要因が次リーグへの生存に影響します。なので、降格するチームを予想というより、現在のリーグでの各チームの活躍を見守ることが最善です。

**私：そうなんだけど、でもお手持ちのプレミアリーグの統計データから何かわかりませんか？**

C：統計的な見方は、チームの成果や順位に影響する変数が多いため降格チームを予想することは困難です。しかし、2023年3月29日現在の下位3チームは、18位Watford FC、19位Norwich City FC、20位Burnley FCです。この3チームが降格圏にいます。もし今日シーズンが終了するとしたら、この3チームが降格します。

| TABLE PREMIER LEAGUE 22/23 |                |         |     |     |
|----------------------------|----------------|---------|-----|-----|
| #                          | Club           | Matches | +/- | Pts |
| 1                          | Arsenal        | 27      | 37  | 66  |
| 2                          | Man City       | 27      | 42  | 61  |
| 3                          | Man Utd        | 27      | 7   | 53  |
| 4                          | Tottenham      | 27      | 12  | 48  |
| 5                          | Newcastle      | 26      | 23  | 47  |
| 6                          | Brighton       | 26      | 17  | 45  |
| 7                          | Liverpool      | 27      | 18  | 43  |
| 8                          | Brentford      | 27      | 8   | 41  |
| 9                          | Fulham         | 27      | 1   | 39  |
| 10                         | Chelsea        | 27      | 1   | 38  |
| 11                         | Aston Villa    | 27      | -6  | 38  |
| 12                         | Crystal Palace | 27      | -13 | 27  |
| 13                         | Wolves         | 27      | -17 | 27  |
| 14                         | Leeds          | 27      | -10 | 26  |
| 15                         | Nottm Forest   | 27      | -27 | 26  |
| 16                         | Everton        | 27      | -18 | 25  |
| 17                         | Leicester      | 27      | -10 | 24  |
| 18                         | West Ham       | 27      | -14 | 24  |
| 19                         | Bournemouth    | 27      | -28 | 24  |
| 20                         | Southampton    | 27      | -23 | 22  |

## 山田さんの徒然なるままに

しかしまだ数ゲーム残っているため、順位はあつという間に変わる可能性もあります。



BBC Sport 2023年3月31日 (プレミアリーグ降格の可能性)

**私:** この情報は去年ののでは？今はどうなんですか？

C: 前回答に誤りがあったことをお詫び申し上げます。AI言語モデルの私は現時点でのデータや統計にアクセスすることはできません。しかし2023年3月29日現在のプレミアリーグの順位はお知らせできます。現在降格の危機にあるチームは、18位Wolves、19位Norwich FC、20位Newcastle United FCです。この3チームが降格圏にいます。もし今日シーズンが終了するとしたら、この3チームが降格します。しかしまだ数ゲーム残っているため、順位はあつという間に変わる可能性もあります。選手の怪我や移籍、チームの調子等の要因から降格を回避する可能性もあります。そのためどのチームが降格することを予想することは困難です。

**私:** ちょっと、なんてこと言うの！Wolvesは現在13位！Norwichはプレミアリーグではなくチャンピオンシップにいるし、Newcastleはプレミアだけど、もう少し上にいるよ。ちゃんとした情報が出せないの？

C: 前回答に誤りがあったことをお詫び申し上げます。確かにWolvesは13位でNorwichはチャンピオンシップにいます。Newcastleも11位(?)でした。2023年4月4日現在(なぜか未来の日付となっている)プレミアリーグで降格圏にいるチームは、18位West Bromwich Albion FC、19位Southampton FC、20位Watford FCです。

もし今日リーグが終了するとしたら、この3チームが降格します。しかしまだ残りの試合があります。なので様々な要因によりこの順位がすぐに入れ替わって降格を免れることも考えられます。前回答に間違いがあったことをお詫びし、またこれがより正確で役立つ情報であることを願います。

**私:** また間違っている！もうあんたなんて信用してやるか！

C: 前回答に誤りがあったことをお詫び申し上げます。私の回答は収集可能なデータに基づいて生成されていますが、エラーが生じる可能性があることを理解しております。私はAI言語モデルで、正確で役に立つ情報をできる限り提供できるように努力しており、フィードバックに基づいて学習し、回答の改善に努めております。またご利用の機会があればと思いますし、正確で信頼のできる情報を提供できるように最善を尽くします。(終)

ChatGPTとコンビを組んで素人漫才をした気分であった。現在の降格圏の3チームの名を伝えるという簡単なことがなぜできないのかと思う反面、最初の回答の中で“今は各チームの活躍を見守ることが最善”というアドバイスは、まさに適確である。間違いを指摘する度に、認めるもののまた間違った回答を繰り返すところ等、こちらもある程度知識を持っていないと、とんでもない方向に進んでしまうのではないかと恐ろしさを感じた。間違った答えを鵜呑みにしていたら、まさに知ったかぶりボケ役ChatGPTのフェイクニュースに騙されてしまうところである。しかし、いったい統計やデータにアクセスできないでどうやって回答を出していたのだろうか。“下手な鉄砲数打ち当たる精神”ではないことを祈るが。予想はできないといっているのだから、そこでやめればいいものの、代わりに最下位の3チームを教えてくれるのは、ただサービス精神旺盛なのか？それとも単にNoといえないのか？

私も反省点があり、前出のTomのようにChatGPTを使いこなすようなうまい質問ができていない点もある。これからたくさん質問をしていくことで、相手の特徴を理解しながら関わっていくのだろうが、それは人間同士との交流と同じで、ロボット相手でもいろんな意味で日々精進、切磋琢磨ということだろう。お付き合いも始まったばかりだ。

その後、ChatGPTの言う通りにしてWolvesの活躍をはらはらしながら見守り、5月末には次期シーズンリーグ残留を果たした。(ほっ)

ちなみに我がチームに日本人選手がいることは皆さんあまりご存じないと思う。川辺駿選手は2022年1月にスイスのGrasshoppersから移籍したが、そのままレンタル移籍で前チームに残って活躍し、8月からWolvesに戻ってくるらしい。我がチーム最初の日本人選手！それも日本代表！ぜひ、彼の活躍に注目し、Wolvesを応援しよう！8月のシーズン開幕ももうすぐだ。



## 離任挨拶

## ■国際協力員 滝沢 航平(東京理科大学)

英国の政治、経済、社会、そして市民生活にとって激動の日々を現地で目の当たりにし、肌で感じながら過ごした一年でした。

業務面では、コロナ以降に繋がりが希薄になってしまっていた多くの大学を訪問し、JSPS事業の広報のみならず、大学経営陣や研究者の皆様との意見交換ができ、各大学の国際共同研究やマネジメントについて学ぶ機会に恵まれました。

なお、英国内での出張時にお会いした 外国人研究者の方が、先日私の所属機関である東京理科大学を訪れ、再会できたことは喜ばしい出来事でした。現在、日本の大学や研究所に英国から共同研究先としての熱視線がより一層注がれている状況は、日本の研究者の皆様こそ身をもって感じていらっしゃるのではないのでしょうか。私も一大学職員として日本の大学の国際化に向けてどれだけ貢献できるか、自分自身にチャレンジを課し、精進していく所存です。

また、プライベートにおいても数多くの貴重な経験を積むことができました。9月には、エリザベス女王の一般弔問に夜通して14時間参列いたしました。ウェストミンスターホールに安置された棺とその上に置かれた王冠や宝珠(オーブ)、王笏(セプター)の息を呑む美しさ、ホール全体の厳かさは一生忘れられることはないと思います。

最後に、渡英前から帰国後までの間サポートいただいた皆様、英国で素敵な出会いの機会を与えていただいた全ての方々はこの場をお借りして心より感謝申し上げます。今後ともJSPSロンドン研究連絡センターへの変わらぬご支援をお願いいたします。



ウィンブル登の風物詩「ストロベリー&クリーム」

## ■国際協力員 全 孝梨(大阪大学)

まずは、NHS(英国の医療サービス)にお世話になることなく、無事に日本に帰国できたことに感謝します。2022年度の英国は、政権交代、王位継承、物価高騰、ストライキ等、激動の時代でした。この1年を振り返ってみると、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響以上に、前述の変化の目まぐるしさを痛感させられたと思います。現地で暮らしながら、こういった大きな変化の流れを直接見て、感じて、また自分の言葉で共有できたことは、とても貴重な体験でした。また、この1年間で、ロンドンを第三の故郷と思うほどに、社会に溶け込み、自分と向き合う過程を楽しむことができました。このような経験をさせてくださった皆様に、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。

この1年間の研修期間を通して、国際交流が学術界において重要な役割を担っていることを実感しました。グローバル化した現代社会では、世界中の研究活動の競争が激化していますが、良きライバルとして互いに学び合い、成長する機会が十分にあることも確認しました。そのためには、多様な視点の意見に耳を傾け、学ぶ感性を持つことが重要です。一例として、英国政府の教育・研究に対する予算編成や実施方法は、日本と似ているようで、内容やスピード、研究者が感じる環境は全く異なっていました。その集大成のように感じたのが、研修最後のケンブリッジ大学訪問でした。研究担当副学長とのミーティングでは、余裕のあるリーダーシップと同時に、自由な意見交換ができるフランクさを感じることができました。英国における課題へのアプローチの多様性は、社会の多様性を象徴するものであり、社会構成員のそれぞれが課題に対して独自の資質と戦略を持ち、その集合体の豊かさとお効性に寄与していると感じました。

業務としては、研修中、国際協力員としてJSPSの国際交流事業を紹介する機会に恵まれたことに大変感謝しています。英語でのプレゼンテーション能力を高めるだけでなく、海外の若手研究者が直面する課題への理解も深めることができました。彼らと直接関わることで、日本の研究に興味を持っていないながらも、実際はどのような部分に戸惑うかを知ることができました。さらに、日本人研究者が海外で活動する際に直面する困難や、日本との交流の拡大を強く望んでいることも分かりました。今後とも、大学として情報発信のあり方を考えていく必要があると考えています。最後に、ロンドン研究連絡センターの今後のご活躍をお祈りするとともに、またお会いする機会をお待ち申し上げております。

Events organised/supported by JSPS London  
from April 2023 to June 2023

- ❑ Pre-Departure Seminar for JSPS Fellows  
@JSPS London Lecturer Hall (Ground Floor) [In-person]  
Fri 21 April 2023
- ❑ JSPS London 春の英国・欧州日本人研究者交流会  
@The Grand Hotel, Devon [Hybrid]  
Fri 28 April 2023 - Sun 30 April 2023
- ❑ JSPS London Symposium and Seminar Scheme  
“Contourites and ocean hazards: slope instability and tsunami  
genesis”  
@The Lyell Centre, Heriot Watt University [Hybrid]  
Fri 2 June 2023

Future events organised/supported  
by JSPS London

- JSPS London 第5回英国サバイバルセミナー  
@JSPS London Lecturer Hall (Ground Floor) [In-person]  
Tue 4 July 2023
- JSPS London Symposium and Seminar Scheme  
“Direct reactions and spectroscopy with hydrogen targets: past 10  
years at the RIBF and future prospects”  
@Hilton York, York [In-person]  
Mon 31 July - Fri 4 August 2023



# JSPS Fellowship Programmes & International Collaborations

## Application Schedule for FY2023/2024

### Fellowship Programmes

\*The Pre/Postdoctoral Short Term programme is also managed by other JSPS overseas offices in Europe and USA independently. For more information, please check their websites.

| Programmes                          | Suitable Applicants      | Apply to        | Recruitment       | 2023 |     |      |     |     |      | 2024- |     |                 |                 |                 |                 |                            |
|-------------------------------------|--------------------------|-----------------|-------------------|------|-----|------|-----|-----|------|-------|-----|-----------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------------------|
|                                     |                          |                 |                   | Jul  | Aug | Sep  | Oct | Nov | Dec  | Jan   | Feb | Mar             | Apr             | May             | Jun             | Later                      |
| Summer Programme                    | Pre/Postdocs             | JSPS LON        | FY2024            |      |     |      |     | TBA |      |       |     |                 |                 |                 |                 | FY2024 Core period Jun-Aug |
| Pre/Postdoctoral Short term (1-12m) |                          | JSPS TYO        | 1st Call (FY2024) |      |     | 29th |     |     |      |       |     |                 | Apr2024-Mar2025 |                 |                 |                            |
|                                     |                          |                 | 2nd Call (FY2024) |      |     |      |     |     | 12th |       |     |                 |                 |                 | Aug2024-Mar2025 |                            |
|                                     |                          |                 | 3rd Call (FY2024) |      |     |      |     |     |      |       |     |                 |                 | 7th             | Jan2025-Mar2025 |                            |
|                                     |                          | JSPS LON        | 1st Call (FY2024) |      |     |      |     | TBA |      |       |     |                 |                 | Apr2024-Mar2025 |                 |                            |
| 2nd Call (FY2024)                   |                          |                 |                   |      |     |      |     |     |      |       |     |                 |                 | TBA             | Nov2024-Mar2025 |                            |
| Postdoctoral Standard (12-24m)      | Postdocs                 | JSPS TYO        | 1st Call (FY2024) |      |     | 1st  |     |     |      |       |     |                 | Apr2024-Sep2024 |                 |                 |                            |
|                                     |                          |                 | 2nd Call (FY2024) |      |     |      |     |     |      |       |     | 26th            |                 |                 | Sep2024-Nov2024 |                            |
|                                     |                          | Royal Society   | FY2024            |      |     |      |     |     |      |       |     | TBA             |                 |                 | Sep2024-Nov2024 |                            |
|                                     |                          | British Academy | FY2024            |      |     |      |     | TBA |      |       |     |                 | Apr2024-Sep2024 |                 |                 |                            |
| Invitational: Long Term (2-10m)     | Mid Career to Prof level | JSPS TYO        | FY2024            |      |     | 1st  |     |     |      |       |     | Apr2024-Mar2025 |                 |                 |                 |                            |
| 1st Call (FY2024)                   |                          |                 |                   |      | 1st |      |     |     |      |       |     | Apr2024-Mar2025 |                 |                 |                 |                            |
| 2nd Call (FY2024)                   |                          |                 |                   |      |     |      |     |     |      |       |     | 26th            |                 |                 | Oct2024-Mar2025 |                            |
| BRIDGE Fellowship                   | Alumni Members           | JSPS LON        | FY2024            |      |     |      |     |     |      | TBA   |     |                 |                 |                 |                 | Jul2024-Mar2025            |

Application period or deadline Fellowship starting time

### International Collaborations

\*The following schedule is for the researchers on the Japanese side.

| Programmes                      | Suitable Applicants       | Apply to | Duration                              | 2023 |     |      |     |     |     | 2024- |     |     |     |     |     |                       |                       |
|---------------------------------|---------------------------|----------|---------------------------------------|------|-----|------|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----------------------|-----------------------|
|                                 |                           |          |                                       | Jul  | Aug | Sep  | Oct | Nov | Dec | Jan   | Feb | Mar | Apr | May | Jun | Later                 |                       |
| JSPS London Symposium & Seminar | Alumni & JBUK Members     | JSPS LON | Symposium: 1-3 days<br>Seminar: 1 day |      |     |      |     | TBA |     |       |     |     |     |     |     | Jun-Feb2025 (TBA)     |                       |
| Bilateral Programme [A]         | Research Groups           | JSPS TYO | Joint Project: Max 2 yrs              |      |     | 27th |     |     |     |       |     |     |     |     |     | Apr2024-Mar2026 (Max) |                       |
| Bilateral Programme [B]         |                           | JSPS TYO | Joint Project: Max 2 yrs              |      |     | 5th  |     |     |     |       |     |     |     |     |     |                       | Apr2024-Mar2026 (Max) |
|                                 |                           |          | Seminar: Max 1 week                   |      |     | 5th  |     |     |     |       |     |     |     |     |     |                       | Apr2024-Mar2026 (Max) |
| Core to Core Programme          | Institutions/ departments | JSPS TYO | Max 5 yrs                             |      |     |      | TBA |     |     |       |     |     |     |     |     | Apr2024-Mar2029 (Max) |                       |

Application period or deadline Project starting time

\*When you apply to JSPS Tokyo, please note that the application periods and deadline above are for the head of the host institution to submit the applications to JSPS Tokyo. The time frames for host researchers to submit their applications to their institution are normally earlier. Therefore, Fellowship candidates must discuss their preparation schedules with their host researchers. Please also check each website for more details.

# Programme Contact Information List

## Fellowship Programmes

### ■ Summer Programme

[JSPS London](#)

### ■ Postdoctoral Standard

[JSPS Tokyo](#)

[The Royal Society](#)

[The British Academy](#)

### ■ Invitational Fellowships

[JSPS Tokyo](#)

### ■ Pre/Postdoctoral Short Term

[JSPS Tokyo](#) [JSPS London](#)

### ■ BRIDGE Fellowship

[JSPS London](#)

## International Collaborations

### ■ JSPS London Symposium/Seminar Scheme

[JSPS London](#)

### ■ Bilateral Programme

[JSPS Tokyo](#)

### ■ Core to Core Programme

[JSPS Tokyo](#)

### ■ JSPS International Joint Research Programme

[JSPS Tokyo](#)

## Follow us ...

- For Japanese researchers in the UK or RoI/ 在英・アイルランド日本人研究者の皆様、ご希望の方に、JSPS London が開催するイベントのご案内やニュースレター等をお届けしています。対象は、英国・アイルランドの大学・研究機関に所属する研究者（ポスドク・大学院生含む）及び在英日系企業研究所の研究者の方々です。下記リンクにてご登録ください。

<https://ssl.jps.org/members/?page=regist>



- JSPS Tokyo が運営するJSPS Monthly（学振便り）は、JSPS の公募案内や活動報告等を、毎月第1月曜日にお届けするサービスです（日本語のみ／購読無料）。情報提供を希望される方は、下記のリンクにてご登録ください。

<https://www.jps.go.jp/j-mailmagazine/index.html>



日本学術振興会 ロンドン研究連絡センター (JSPS London)

14 Stephenson Way, London, NW1 2HD, United Kingdom

Tel : +44 (0)20 7255 4660 | Fax : +44 (0)20 7255 4669

E-mail : [lon-info@overseas.jps.go.jp](mailto:lon-info@overseas.jps.go.jp) | <https://www.jps.org>

JSPS London ニュースレター

監 修: 小林 直人

編 集 長: 安原 幸司

編集担当: 高橋 実希